

氏名（本籍）	坂間 伊津美（静岡県）
学位の種類	博士（保健医療科学）
学位記番号	博甲第28号
学位授与年月日	令和2年3月18日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	保健医療科学研究科
学位論文題目	新生児の泣きに対する母親のストレス軽減と対処能力向上をめざした妊娠期における教育介入の効果
学位審査委員	
主査	茨城県立医療大学教授 博士（保健学） 富田 和秀
副査	茨城県立医療大学教授 博士（医学） 山口 忍
副査	茨城県立医療大学教授 博士（図書館情報学） 富田 美加
審査員	慶應義塾大学名誉教授 博士（看護学） 近藤 好枝

### 論文の内容の要旨

【背景】少子化や世帯構造の変化により、乳児との接触体験が乏しく、子どもの泣きへの対処に不安やストレスを感じる母親が増えている。少子社会における子育て世代への不寛容さも、子どもの泣きが強いストレスサーとして母親に受け止められる一因になっている。また近年、乳児の泣きは、産後の抑うつと関連することや、乳幼児揺さぶられ症候群、虐待による乳幼児頭部外傷の引き金要因となることが明らかになってきている。一方、妊娠期の母親を対象とした現行の出産準備教育は、子どもや育児についての内容が十分とはいえず、しかも言葉を話せない乳児とのコミュニケーション技術を学習するには時間を要する。そのため、初めて育児を行うことになる妊婦が、スムーズな育児のスタートに向けて、あらかじめ乳児の生活リズムや泣きなどについて学習し、泣いている子どもに対応できる技術を身につけられるよう、妊娠期から支援していくことが有用だと考える。

【目的】本研究の目的は、新生児の泣きによる母親のストレス軽減と対処能力向上をめざした妊娠期における教育介入の効果を検証することである。

【方法】本研究は2つの研究で構成されている。第1研究では、質問紙調査に用いる測定用具の検討と教育プログラムの作成を行った後、新生児の泣きに関する教育が、泣き声聴取時の認知・心理・生理的反応に及ぼす影響を検討するため、女子大学生18名を教育群と対照群に無作為に割り付けて実験を行った。質問項目は、乳児の世話体験、泣きへの理解、泣きへの対処可能感、困りごととしての泣きの捉え方、新版STAI、対児感情評定尺度、蓄積疲労等であり、生理的指標としては唾液中 $\alpha$ アミラーゼ、指尖容積脈波、皮膚コンダクタンスを測定した。

第 2 研究では、新生児の泣きに関する妊娠期の教育介入の縦断的効果を検討するため、妊娠 32 週以降で母子ともに正常な経過をとる初妊婦 113 名を教育群と対照群に割り付け、介入前、介入直後、産後 4～5 日、産後 1 か月に質問紙調査を行った。主な質問項目は、第 1 研究と同様であり、そのほか、分娩、産褥経過についても尋ねた。分析は、二元配置分散分析を用いた。なお、研究は茨城県立医療大学倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果及び考察】第 1 研究の結果、測定用具の信頼性  $\alpha$  係数はすべて 0.7 以上であり信頼性を確保できた。教育プログラムは、パンフレットを用いた新生児の泣きに関する説明と、泣きへの対処方法の練習で構成し、1 回 1～3 名を対象に約 30 分間で実施した。教育介入は、泣きへの理解、泣きへの対処可能感を有意に高めたが、心理的・生理的反応への影響は示さなかった。教育の受講では心理・生理的反応の変化が生じにくい可能性や、泣き声刺激の声質や泣き方などストレスラーとしての程度が関連した可能性がある。

第 2 研究では、4 回の調査に回答した 77 名（教育群 30 名、対照群 47 名）について分析した結果、教育群の泣きへの理解は、介入直後、産後 4～5 日において対照群との有意差がみられ、一定の持続効果を確認できた。教育群はあらかじめ知識を得たことにより一般論としての子どもの泣きを理解し、過度な不安反応を伴うことなく、わが子を注意深く観察するため、よりすみやかな理解が続いたのではないかと考える。困りごととしての泣きの捉え方は、介入直後のみ、教育群は対照群に比べ有意に低くなり、泣きへの対処可能感も、介入直後のみ、教育群で有意に高くなった。状態不安、対児感情は、時間による主効果のみがみられた。さらに、わが子が泣きやまない時の母親の行動には、介入による差がみられなかった。また、泣きへの理解と産後の認知・心理的各要因との関連を検討した結果、泣きへの理解が高い場合、泣きへの対処可能感や子どもへの接近感情が高く、また困りごととしての泣きの捉え方が低かった。したがって、泣きへの理解を高めることが重要だと考える。

【今後の課題】教育介入による効果がさらに持続するよう、産後での教育介入の機会の追加や方法、母子の愛着形成に働きかけるようにするなど、教育介入の内容を検討していくことが課題である。

【結語】泣きに関する教育介入は、泣きへの理解、泣きへの対処可能感を有意に高めた。母親への調査では、泣きへの理解は産後 4～5 日までその影響が持続したことから、一定の効果があったといえる。

## 審査の結果の要旨

本論文の審査では、令和2年2月5日に公開の場での研究発表と質疑応答を行った後に、上記の審査員4名による協議が行われた。論文審査は、本研究科の指針に従い、創造性・新規性、専門領域との関連性、論理性、信頼性・妥当性、論文の表現力、倫理的配慮の観点から行われた。以下に、各観点に関する協議内容の要旨を述べる。

新生児の泣きは、母親への強いストレスとなり、産後の抑うつや乳幼児揺さぶられ症候群、虐待による乳幼児頭部外傷等との関連性が指摘されている。それにも関わらず、これまでの研究では、妊娠期の母親を対象とした育児教育の介入を試みた報告はほとんどない状況である。そのような中で、本研究は新生児の泣きに対する母親のストレス軽減ならびに対処能力向上を目指した教育プログラムを開発し、妊娠期から教育介入を検証しようとした点は新規性を有すると評価できる。そしてこの教育プログラムの効果は、産後4～5日までその影響を持続することが分かり、一定の効果があると言えた。また産前後の繊細な時期の母親に対して、介入研究を実行した点も高く評価できる。

本研究で目指した新生児の泣きに対する母親の理解と対処能力向上は、精神的健康促進ならびに養育能力向上において重要であり、社会的必要性は高い。また本研究の成果は、母親や新生児に対する看護学の可能性を広げるとともに、教育プログラム自体のシンプルさも相俟って、児童虐待の諸問題を抱える社会全体へのインパクトも大きいと考える。

本研究は、実験研究と縦断的調査研究から構成されており、体系的に組み立てられている。本論文では、研究の目的や方法に至る筋道について先行研究がレビューされ、概ね論理的な一貫性は担保されていた。ただし、研究の作業仮説を十分に説明できる成果が出ていない点が指摘された。国内外ともに先行・関連研究論文を広くレビューし、明らかにしようとする問題の背景およびリサーチクエスチョンをさらに整理し論述すると説得力が増すと思われる。なお、研究仮説を十分に立証できない部分においては、考察等で丁寧に議論されていた。

本論文の信頼性・妥当性については、実行バイアスならびに測定バイアスに関する考察がやや不十分であった。教育プログラムは研究者が考案し、研究者が対象の割り付け、実施、結果評価、解析まで行っており、介入の一貫性をどのように確保したかについて記述が不足している点が指摘された。これらのような懸念事項はあるものの、データとその解析については一定の水準に達していると判定された。

論文の表現力については若干の追記ならびに修正箇所があったものの、博士論文として一定の水準に達している。

倫理的配慮については、茨城県立医療大学倫理委員会の承認を得て行っており、対象者ならびにデータ収集方法、分析過程での倫理的配慮は十分なされていた。

以上の論文審査結果を総括して、審査員全員の合意のもとに、本論文が博士論文として適切であることを認めた。